

d. La dernière course s'est courue hier soir.

(以上, Zribi-Hertz)

se-moyen の生起する統語的環境について検討すると、極めて興味深い事実が観察される。虚辞の非人称主語代名詞が生起する非人称構文において *se-moyen* が生起する場合には、常に個別事象を表し、継続的な性質・状態を表すことはできないという事実である。内項の名詞句が主語位置に生起する構文と異なり、この場合には内項として具象性の高い名詞句も生起可能である。個別事象を表すのであるから、このような例は全て受動用法である。

(3) a. Il se boira beaucoup de vin ce soir.

(Obenauer)

b. Il s'est recyclé 300 tonnes de papier en France cette année.

c. Il s'est mangé une racine ici autrefois.

d. Il s'est vendu deux de tes livres ce matin.

e. *Il se vend bien deux de tes livres.

f. Il se joue deux sonates de Haendel ce soir à la MJC.

g. *Il se joue deux fa dièse avec le troisième doigt.

(以上, Zribi-Hertz)

受動態との対立点としては、(3)の例のように *se-moyen* では他動詞のみが生起可能で、自動詞は不可能である点が挙げられる。⁵⁾

(4) a. *Il se dort souvent ici.

b. Il a été dormi ici récemment.

c. *Il s'est abouti à un compromis acceptable.

d. Il a été abouti à un compromis acceptable.

e. *Il ne se pactisera pas avec l'ennemi.

f. Il ne sera pas pactisé avec l'ennemi.

(*ibid.*)

また、受動態とは異なり、*se-moyen* では外項に対応する要素（典型的には、動作主）を明示化することはできない。

(5) a. *Cette voiture se gare facilement par n'importe qui.

b. *Ce point s'est discuté par plusieurs personnes.

(*ibid.*)

しかし、*se-moyen* においても外項に対応する要素は意味的には含意される。(6)では、動作主の存在を含意するジェロンディフや副詞が生起しており、明示されない動作主が想定されていることが示唆されている。

(6) a. Le poulet se cuit en le tournant fréquemment.

(Jones(1996))

b. Ce type de branche se casse d'une seule main.

c. La question s'est discutée hier avec passion dans la salle du conseil.

(BGL)

2. 先行研究

se-moyen についての先行研究は、拡大標準理論の時代に多くなされたのに対して、それ以降ではあまり研究が進められていないと言える。ここでは、その中から最も包括的な *se-moyen* についての分析を提示した Zribi-Hertz と、最小主義理論による数少ない分析例と言える三藤の、それぞれの要点を確認する。

2. 1. Zribi-Hertz

Zribi-Hertz は *se-moyen* が、*pro-drop* の特徴を有するロマンス諸語における受動の *se* 及び非人称の *se* と全

する統語的環境によってその用法が決定されるというもの、もう一つは両者を別の要素として設定するというものである。形態的に同じ形式をもっているということから、従来は再帰代名詞全体の中で *se-moyen* がどのように位置付けられるかという視点が中心に置かれてきた。この視点のもとでは、再帰用法も含めて再帰代名詞“*se*”は基本的に同じ要素であるが、特定の統語的特性において違いがあり、それが用法の違いを引き起こしているという考え方が基本となる。この考え方は、前述の二つの捉え方のうち、前者を基本としながらも後者を部分的に取り入れたものであると言えよう。本稿では、従来のこのような見方を否定はしないものの、再帰代名詞という要素のもつ様々な機能を詳細に再検討しなければその全体的な捉え方が決定できないという立場から、*se-moyen* に限って詳細に議論を進めることとし、全体的な把握は今後の課題としたい。

SM と SP の相違は、両者がまったく同じ要素であるという前提では簡潔に説明することは極めて難しいと言えよう。しかし、伝統文法において両者が区別されずに記述されてきたという事実は、両者が全く別個の要素としてのステイタスをもつと分析することの不自然さを示していると言える。そこで、本稿では、基本的特性は“*se-moyen*”として両者に共通しているものの、ある特定の部分で性質が異なり、その差異が分布上の相違を引き起こしているという立場をとる。⁶⁾

名詞的要素の統語的ステイタスを考察する上で重要な概念は二つある。動詞との意味的關係に関わる θ 役割と文レベルにおける形態統語的概念である格である。*se-moyen* がこの二つの点に関してどのように特徴付けられるかをまず考察したい。

θ 役割については、1 節の(6)の例に見られるように SM と SP のいずれにおいても外項の θ 役割を担う要素の存在が含意されている。⁷⁾ この事実は、文の中に外項の θ 役割を担う要素が統語的に存在すると考えれば簡潔に説明される。当該構文においてその役割を果たしていると考えられるのは *se-moyen* 以外には考えられない。従って、以下のように仮定する。

(9) *se-moyen* は外項としての θ 役割を担う。

このように仮定した上で次に問題となるのは、*se-moyen* が構造上どの位置に併合されるかという問題である。外項の θ 役割を担う要素は、語彙部門において操作が加えられない限り、vP 指定部に生起する。しかし *se-moyen* が vP 指定部に併合されるとは考えられないことを示唆する言語事实在存在する。それは、対象の θ 役割を担う項が人称に関して動詞と形態的に一致するという事実である。英語等の他の印欧諸語と同様、フランス語において動詞と人称一致する要素は、統語上のいわゆる主語としてのステイタスをもつ。これは理論的には、TP 指定部に移動して主格の照合を受ける要素であるということである。すると、*se-moyen* 構文においては、VP の補部に併合される対象の θ 役割をもつ項が TP 指定部に移動しなければならないことになる。ここで、もし *se-moyen* が vP 指定部に併合されるのであれば、この vP が Chomsky(2001) において提案されている Phase を構成することになる。⁸⁾ すると、VP 補部の位置から TP 指定部への対象項の移動が Phase 不可侵条件に違反してしまうため、容認されない派生となってしまう。

そこで、本稿では以下のように提案する。

(10) *se-moyen* は軽動詞の主要部に併合される。

se-moyen は通常の名詞句とは異なり、クリティックとして常に動詞に形態的に依存する性質をもつ要素である。クリティックは動詞に編入されると一般には分析されるので、再帰代名詞が *v* に直接併合されると考えても不自然ではない。このように考えると、*vP* 指定部を占める要素は存在しないために *vP* が *Phase* を構成しない。このため、対象項の名詞句が *Phase* 不可侵条件に違反することなく *TP* 指定部に移動することが可能となり、適格な派生が成立する。この派生を図で示すと以下のようになる。

(11) [_{TP} DP_i [_T [[_v *se-v*] -V_k]]_J-T [_{VP} t_j [_{VP} t_k t_i]]]]

次に、*se-moyen* が関係付けられる格について考察しよう。ここで重要なのは、1 節の(4)で見たように *se-moyen* が他動詞以外の動詞と共起できないという点である。他動詞とそれ以外の動詞を最も明示的に区別する特徴は対格の照合能力の有無である。すると、上の事実は以下のように仮定することで説明される。

(12) *se-moyen* は対格素性をもつ。

名詞句の格素性は解釈不能な素性なので、適切に照合されねば派生が破綻してしまうことになる。(4a,c,e)では、*se-moyen* の対格素性を照合できる要素が存在しないために非文となると説明できる。ここで問題となるのが、受動態との対立である。1 節の(4b, d, f)で見たように、受動態は、非人称構文において他動詞以外の動詞でも可能である。英語等の他動詞以外では受動態が許容されない言語については、Chomsky(1981)のように受動形動詞が対格を吸収すると分析するか、もしくは Baker(1988)のように受動形態素が対格を付与されると分析するのが一般的である。フランス語の受動態には、このような分析が適用されないということになる。では、フランス語の受動態についてどのように考えるべきであろうか。本稿では、以下のよう

(13) フランス語の受動形態素は随意的に対格素性をもつ。

随意的とは、他動詞と共起する場合には他動詞のもつ対格素性の照合のために受動形態素が対格素性をもつが、自動詞と共起する場合には対格素性をもつ必要がないということである。これに対して、受動態における外項の θ 役割の扱いについては、英語のそれと同じであると考えられる。すなわち、Chomsky に従って受動形動詞が外項の θ 役割を吸収するという分析、もしくは Baker の受動形態素が外項の θ 役割を付与されるといふ分析が適用される。この部分に、まさに自動詞の受動態の本質が示されていると言えよう。機能的観点から見ると、外項の名詞句が背景に後退させられることにより、動詞句によって表されるプロセスの存在自体に焦点が当てられることになる。この機能はまさに非人称構文の機能と合致するものであり、自動詞の受動態がもつばら非人称構文において生起するのも当然なのである。

最後に、動作主の明示の可否について触れておきたい。1 節の(5)に見られるように、SM 構文は動作主が明示されないという点で受動態と対立する。この事実は、受動形態素と *se-moyen* に関する語彙的特性の違いに起因すると考えられる。*se-moyen* は特定化されない動作主を指示する要素であるために、特定化され

たφ素性、特に性に関する素性はもたない。このために性に関するφ素性をもつ名詞句によって動作主を明示すると、動作主を指示する要素間でφ素性の不一致が生じ、非文となる。これに対して、受動形態素は特定化されたものを含むあらゆる動作主に対応する要素なので、性に関して[±masculine]という可変的な値をもっていると考えられる。これらの値はどのような名詞句のφ素性とも合致するので、動作主が明示されても文法的となると説明できる。

3. 2. SM と SP の違い

SM と SP を区別する分布上の相違は3点ある。第1点は前者には点的時制と共起できないという時制に関する制約が見られるというもの、第2点は後者には内項の名詞句が主語として生起する場合、具象性の低いものでなければならないという意味的特性に関する制約が見られるというもの、そして第3点は前者が非人称構文において生起不可能であるというものである。以下では、この3点を順次考察することとする。

まず第1点として、SMの時制に関する制約は、SMのもつ時制素性という観点から分析したい。SMは軽動詞vに併合される。Vは義務的にTへ移動するので、SMも共に移動することになる。Tは一致・時制に関わる要素であるので、それぞれの素性をもっている。ここで、SMが時制に関する素性をもち、Tの素性と照合されると考えてみよう。具体的には、未完了相の時制と共起するので、素性としては[-perfect]が考えられる。しかし、一定期間を示す複合過去形と共起する例も見られるので、ここでは[+continuous]という素性を設定する。この素性は名詞句の意味的特性から生じるものではないので、以下のように仮定する。

(14) SM は解釈不能の[+continuous]という素性をもつ。⁹⁾

個別事象に対応する時制の場合、Tは[-continuous]の素性をもつ。もしSMがこのような時制と共起したばあいには、SMの[+continuous]の素性がTと適切に照合されないために、派生が破綻する。このため、受動用法が許されない具象名詞が主語となっている1節の(1f, h)が非文となると説明される。

次に第2点として、SP構文において内項の名詞句が主語として生起する場合の意味的制約について考察を進めたい。この制約は、名詞句の意味的特性に関わるものであるため、解釈可能な素性という観点から分析可能である。ここで問題となる名詞句の具象性の度合いは、他動詞の意味に関して議論される“affectivity”という概念によって捉えることができる。すなわち、具象性の低い名詞の場合には、動詞が指示する動作によって対象の名詞句の指示対象に与えられる影響の度合いが低いと考えられる。これを[-affected]という素性で表すこととしよう。すると、受動用法において主語として生起する名詞句、すなわちTP指定部に移動する名詞句には[-affected]という素性が必要であるということになる。では、この制約はどの要素によって課されるのであろうか。T主要部がこのような意味的特性をもっているとは考えられないので、唯一の候補はSPである。そこで、SPについて以下のように仮定したい。

(15) SP は[-affected]という素性をもつ。

SPは軽動詞vと共にTに移動しているので、TP指定部に位置する要素と一致する。ここで、TP指定部の名詞句はSPの素性と矛盾する素性をもつてはならないと考えることができる。すると、[+affected]の素性をもつ名詞句がSPと共に起できないことを示す(1b, c, f, h)が説明される。これらの文では、主語位置に生起する内項の名詞句が[+affected]の素性をもっているため、[-affected]の素性をもつSPと一致することができないことから、非文となるのである。¹⁰⁾

ここで、SPが[-affected]の素性をもつ根拠を考えてみたい。そもそもSPが生起する文の機能とは、事象における動作主の存在を前景から背景に移行し、事象の生起そのものに焦点をあてるというものである。これは、動作の対象に対する動作主の影響力が低下させられるということの意味する。これが[-affected]という素性をもつ本質的意味であると考えられる。これに対して、SMにはこのような素性がない。これも、SMの生起する文の機能を考えることによって説明される。この文の機能とは、対象の名詞句が不特定多数の人間によってある動作を受けるという性質をもっていることを表すというものである。このことは、個別事象を表す場合には、複数の動作主を含意する副詞句表現と共に起できないという事実が示している。

(16) a. Cette histoire se raconte de toutes parts.

b. *Le crime s'est commis de toutes parts ce matin.

c. *La décision s'est prise ce matin de toutes parts.

(Zribi-Hertz)

この事実は、SMが3人称複数という具体的な ϕ 素性をもつ要素であると考えられることで説明される。このように特定化された ϕ 素性をもつということは、SMの存在が必ずしも背景に後退させられているのではないことを意味する。従って、動作主の対象に対する動作の影響が大きくても構わないために、affectivityに関する制約が課されないと考えられる。

最後に第3点として、非人称構文について考察しよう。非人称構文においてはSPのみが生起可能であり、SMの生起は許容されない。この事実は、Diesing(1992)における“individual level”と“stage level”の二つの解釈の対立が関与していると考えられる。individual levelとは一定期間成立する性質・状態に対応する解釈で、stage levelとは個別の事象に対応する解釈である。SMは前者、SPは後者にそれぞれ対応する。Diesingは名詞句の統語的位置と両解釈に対応関係が存在すると主張する。すなわち、TP指定部にある名詞句はindividual levelの解釈を与えられるのに対し、VP内にとどまる名詞句はstage levelの解釈に対応するのである。では、この主張は最小主義プログラムにおいてどのように解釈されるであろうか。本稿では、individual levelの解釈の場合、[+individual]という素性をもつと仮定する。この素性は、[+continuous]という素性の存在を前提とするものであると考えられる。¹¹⁾ この[+individual]という素性は、Tのもつ別の素性であるEPP素性と同様にT本来の意味的特性に関わるものではないので、解釈不能の素性である。従って、EPP素性と同時に照合されるべく、名詞句をTP指定部に牽引(attract)する。EPP素性と異なるのは、[+individual]は具体的指示対象をもつ名詞句によってしか照合されないもので、虚辞の要素では適切に照合されないという点である。このように、Diesingの提案はTのもつ解釈不能の素性という形で再解釈が可能なのである。

以上の前提にたつて、当該現象を考えてみよう。SMが生起する文、すなわち中間構文の本質的機能は

individual level の叙述である。このため、SM が併合される v は[+individual]という素性をもつ T の併合を要求すると考えられる。すると、T の[+individual]を照合するために、指示対象を持つ名詞句が TP 指定部に位置しなければならない。非人称構文においては、内項の名詞句は VP 内にとどまったままであり、TP 指定部には指示対象をもたない虚辞の人称代名詞が併合される。このため、T の EPP 素性は適切に照合されても[+individual]の素性が照合されないために、派生が破綻し非文となるのである。これに対して、SP はそもそも stage level に対応する要素である。このため、T には EPP 素性以外に解釈不能の素性が存在しない。従って、内項の名詞句が TP 指定部に移動しなくとも虚辞の代名詞によって T の唯一の解釈不能の素性である EPP 素性が照合され、名詞句が VP 内にとどまっても問題がないために、非人称構文において SP が生起可能なのである。

この分析は、SM 以外の事実も説明する一般性の高いものである。非人称構文では個別事象としての解釈のみが可能であり、状態の解釈は不可能である。このため、状態性の述語は非人称構文において生起することはできない。

(17) a. Il marche trois poupées ici.

b. Il est fermé plusieurs portes ici.

c. *Il est malade plusieurs pensionnaires actuellement.

(Zribi-Hertz)

状態の解釈が名詞句と[+individual]をもつ T との照合によって認可されると考えると、内項の名詞句が VP 内にとどまったままではこの照合が不可能となることによって(17c)のような文は非文となると説明される。

最後に、SP が生起する非人称構文において内項の名詞句に具象性に関する制約が見られない理由も上記の分析から簡潔に説明されることを示したい。非人称構文では内項の名詞句が VP 内にとどまっており、TP 指定部には虚辞の代名詞“il”が併合される。この要素は意味的な内容をもたないため、当然 affectivity に関しては値が指定されていない。このために T 主要部に位置する SP と一致しても問題がないのである。名詞句がもつ affectivity の素性は時制要素とは異なり、あくまでも名詞に関わる解釈可能な素性であり照合の必要はない。従って、VP 内にとどまったままの名詞句と SP の一致は行われないのである。

3. 3. 使役構文との共起

3.1 節で、*se-moyen* が対格素性をもつと仮定したが、これを支持する現象として使役構文において *se-moyen* の生起が許容されないという事実が挙げられる。

(18) a. *Les mœurs actuelles font se dire cela surtout pour ennuyer les gens.

b. *Leur rondeur fait se manger bien en parlant les noisettes.

c. *Un prix intéressant ferait s'acheter un tel jouet pour soi-même.

(Kayne(1977))

これに対して、本来的用法としての *se-moyen* は使役動詞の補文として現れることができる。

(19) a. Le choc a fait s'évanouir la jeune fille.

b. Les nombreuses insultes ont fait s'en aller le jeune homme.

c. Voilà ce qui l'a fait s'en prendre à son patron.

(*ibid.*)

この対立を説明する上で、Fujita(1999)において提案された使役構文に関する分析を前提とする。Fujita にお

ける主要な主張点は、使役動詞と補文の不定詞が統語的に複合動詞を形成するために、対格素性が照合される要素が一つになるということである。すなわち、(18)、(19)において対格素性をもつ要素は一つに限られると主張している。(18)では、*se-moyen* の他に格素性をもつ要素は使役者名詞句と被使役者名詞句である。前者は主格素性をTによって照合されるが、後者は対格素性をもっているはずである。すると、(18)が非文となるのは、*se-moyen* と非使役者名詞句という二つの要素の対格素性が複合動詞によって同時に照合されることができないためであると説明される。これに対して、(19)において生起する本来の用法の再帰代名詞は、語彙部門における操作によって動詞と関連付けられる要素と考えられる。¹²⁾すると、統語部門において項としてではなく語彙の一部として動詞の中に組み込まれた形で併合されるので、統語的に独立した要素としてのステイタスをもたないため、格素性をもつとは考えられない。従って、(19)では対格素性をもつ要素が被使役者名詞句のみとなり、適切に格照合が行われるために文法的となるのである。¹³⁾

4. 結論

本稿は、いわゆる *se-moyen* が外項としての θ 役割及び対格素性をもち、軽動詞の主要部に併合されるという統語的性質をもつと主張した。また、従来のように *se-moyen* を一括して扱うのではなく、厳密な意味での中間用法として用いられる SM と個別事象を表す受身用法としての SP に区別する必要があることを示し、前者は [+continuous] という解釈不能の素性を、後者は [-affected] という素性をもつと分析した。これにより、*se-moyen* が用いられる構文に観察される時制に関する制約や主語名詞句に関する意味的制約、*se-moyen* が生起する非人称構文が個別事象のみを表すという事実が簡潔に説明された。更に、*se-moyen* と受動形態素との統語的特性の違いについても言及すると同時に、使役構文において *se-moyen* が生起できないという事実も本稿の分析により説明されることを示した。

フランス語に限らず、ロマンス諸語をはじめとする様々な言語において、再帰代名詞という要素は互いに関係付けるのが容易ではない複数の機能を担っている。これらの機能が一つの形式によって担われているという事実は、背景に何らかの共通性が存在することを強く示唆しており、それを理論的に明らかにしようとする努力はそれぞれの理論的枠組に則ってなされていると言える。本稿は、*se-moyen* という要素が項として自立した統語的ステイタスをもっていると主張したが、この性質は再帰代名詞本来の機能とも言える再帰・相互用法で用いられる再帰代名詞との共通性を、統語論の観点から理論的に提示したものと見える。非対格動詞として用いられる、いわゆる中立用法の再帰動詞と *se-moyen* との関係も重要なものであるが、この点については稿を改めて詳細に検討しなければならない。

註

¹⁾ 本稿では、受動態という用語は“être+過去分詞”によって形成される受動構文を指すものとする。

²⁾ 代表的なものとして、Obenauer(1970)、Zribi-Hertz(1982)、三藤(1996)等が挙げられる。

³⁾ ただし、点的時制であっても、個別事象ではなく、過去の一定期間において繰り返された行為を完了相として捉える場合には可能となる。これらの例も、中間構文であると考えられる。

i) Cette racine s'est mangée autrefois.

ii) Les cuisses de grenouilles se sont mangées pendant longtemps. (Zribi-Hertz(1982))

4) 査読委員から(2)の例は定冠詞を伴っているため、名詞句全体としては具象性が高いのではないかという指摘があった。本稿では、*se-moyen* の認可に関与するのは、3.2 で述べるように名詞自体のもつ“affectivity”という意味的概念によって決定される具象性であり、限定詞によって決定される名詞句の指示性ではないと考える。

5) (4b,d,f)は話者によっては容認度がかかり落ちる。このような話者の場合、受動態素が対格素性と強く結びついていると考えられる。

6) これ以降本稿では、*se-moyen* という用語を SM と SP の両者を統合する名称として用いる。従って、“moyen” という語の本来の意味である中間用法という概念は、SM で表されることになる。

7) 外項の θ 役割としては典型的には動作主であるが、以下に見られるように経験者の例も見られる。

i) La tour Eiffel se voit mieux de loin.

ii) Ce genre de musique s'entend le matin. (Zribi-Hertz)

8) Phase とは統語操作が行われる限界となる領域を定めたものである。定義を以下に示す。

The domain of H is not accessible to operations outside HP ; only H and its edge are accessible to such operations.(p.13)

統語操作によって Phase を越えて要素を関係付けることを禁ずるのが Phase 不可侵条件である。

9) 査読委員から、本稿で仮定している解釈不能の素性が当該構文以外においてどのように働くのかという疑問点が指摘された。一つの可能性として、本稿において触れることのできなかった受動態における時制に関する制約や動作主の前置詞標示にこの素性が関与していると考えられる。この問題に関しては、他の意味素性との関連性も含めて更に詳細に検討する必要がある、稿を改めて論じることとしたい。

10) この affectivity の素性は絶対的なものではなく、話者によって差が見られる。Zribi-Hertz は以下の例が容認不可能ではないとしている。

i) ?Ce document s'est envoyé hier soir.

ii) ?Ce sandwich s'est préparé hier soir.

しかし、上記 i), ii) を容認不可能ではないとする話者にとっても i), ii) が完全に容認可能ではないことから、affectivity の素性が関与していることは明らかである。

11) [+individual] と [+continuous] は関連性があるものの、同じ素性であると考えすることはできない。[+continuous] であっても [+individual] でない例があるからである。具体的には、以下の非人称構文が該当する。

Il se rencontre à Paris des gens de toutes origines.

(Zribi-Hertz)

12) ここで本来的用法と呼んでいるものは語彙化されている度合いの高いものであり、非対格動詞に対応するいわゆる中立法は含まない。非対格動詞としての代名動詞をどのように分析するかは今後の課題である。

13) 再帰用法・相互用法の再帰代名詞は使役構文の補文に生起することが可能である。

i) La crainte du scandale a fait se tuer le frère du juge.

ii) Le hasard a fait se connaître Jean et Marie sur le pont de France.

(Kayne)

この事実は、以下のように説明される。*se-moyen* と異なり、これらの再帰代名詞は名詞句と同一指標をもつ。この条件のもとで、移動による格照合と Agree による格照合という二つの対格照合が可能となると考えられる。

参考文献

Baker, Mark C. (1988) *Incorporation*, The University of Chicago Press, Chicago and London.

Boons, J.-P., A. Guillet and Ch. Leclère (1976) *La structure des phrases simples en français, I: constructions intransitives*, Droz, Geneva.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

_____ (1995) *Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge.

_____ (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” In Roger Martin et al. (eds.) *Step by Step*, pp.89-155, The MIT Press, Cambridge.

_____ (2001) “Derivation by Phase,” In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, pp.1-52, The MIT Press, Cambridge.

Diesing, Molly (1992) *Indefinites*, The MIT Press, Cambridge.

Fujita, Takeshi (1999) “Les pronoms clitiques non-réfléchis en français”, 『言語研究』第 115 号, pp.7-49.

Jones, M.A. (1996) *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

Kayne, Richard S. (1977) *Syntaxe du français*, Seuil, Paris.

Obenauer, H. (1970) *La construction pronominale passive en français moderne*, unpublished master's thesis, University of Paris VIII.

Ruwet, N. (1972) *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Ophrys, Aix-en-Provence.

Zribi-Hertz, Anne (1982) “La construction “SE-MOYEN” du français et son statut dans le triangle:

moyen-passif-réfléchi, *Linguisticae Investigationes* VI:2, pp.345-401.

三藤 博 (1996) 「フランス語の中間構文と能格構文について」, 『仏文研究』XXVII, pp.1-22.